ふるさと（オナーティン作曲、オリオンコール編曲、作詩者不詳）に想う

2024 年 11 月 6 日
男声合唱団 阪南メンネルコール
江川　猛

男声四部合唱曲の「ふるさと」を第 38 回泉南地区合唱フェスティバルに演奏することになった。
他団の男声合唱団が、オナーティンの「ふるさと」を演奏する映像を見るにつけ、いつかは歌いたいと思っていた一曲である。正式に演奏会で歌う機会がおとずれ、メンネルコールでは仕上げの真っ最中である。
「ふるさと」の原点を知りたいと思い調査することにした。

オナーティン作曲の「ふるさと」は、グリークラブアルバムの研究 28　ふるさとに詳しく掲載されている。
ここには原曲が不明でかつ作曲者のオナーティンも見つけられなかったと記されている。
オリオンコールが最初に「ふるさと」を歌った記録が昭和 6 年 11 月と記されているが、確証はない。
確実なのものは昭和 8 年 1 月に開催予定であった東京六大学合唱連盟第一回演奏会の合同演奏の曲目に載っており、楽譜もあったことからこの時期に演奏された可能性が高いといわれている。

我々の楽譜には編曲オリオンコールとなっているが、グリークラブアルバムの研究 28 では、訳詞オリオンコールとなっている。いずれが正しいのか不明のままである。
長崎大学学術研究成果リポジトリに「戦前の男声合唱団・オリオンコール」のレポート[※1]があり、このレポートによればオリオンコールは昭和 3 年（1928）、社会人を中心として結成されたアマチュアの男声合唱団で、昭和 17 年（1942）までの 14 年間の活動後に姿を消してる。コンクール、演奏会、レコードの吹き込み、ラジオ出演など、幅広く活動していたようです。レコードはわかっているものだけで 18 枚もあるという。アマチュアとはいいながら、コンクール入賞実績のある音楽学校の学生を集め、指導陣に多数の音楽家（山田耕筰など）が名を連ねていたので、当時のアマチュア合唱団の中では別格だったことはほぼまちがいないようである。
「日本の合唱史」の編集者である戸ノ下達也さんによれば、「オリオンコールの団長の吉田永晴さんあたりが楽譜を手に入れて訳したのかもしれない。」とするも明確な答えは得られていないとある。

歌詞は「山はあおき我が故郷」が 1 番、2 番が「水は清き我が故郷」で始まる。原曲にこの言葉があったかどうかは不明だが、オリオンコールが訳詞をしたとすれば、唱歌の「ふるさと」のフレーズを採用した可能性もある。
唱歌「ふるさと」は大正 3 年（1914 年）に文部省唱歌として発表されているので、オナーティンの「ふるさと」よりは古い。

「山はあおき故郷」、「水は清き故郷」は、故郷を偲び想う気持ちの総称であり、たとえ故郷を離れたとしても忘れ難い存在として映るからだと思う。故郷は、台風や水害などにあって一時的に故郷を離れなければならないことがあったとしても、決して忘れることができない存在である。いつかは故郷に帰って来ようという強い気持ちが、「名残惜しい」を何回も何回も繰り返す最終フレーズに表現されているのではないかと考える。

※1_戦前の男声合唱団・オリオンコール
https://nagasaki-u.repo.nii.ac.jp/record/10300/files/bunkanken6_4.pdf

以上